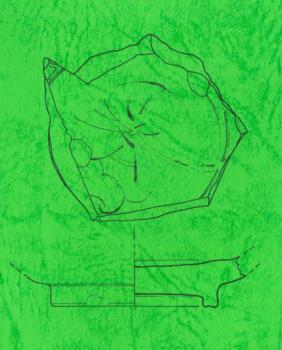
九山遗跡

一経営体育成基盤整備事業隅地区に伴う —発掘調査報告書



2010年3月 益田市教育委員会 本書は、益田市教育委員会が平成 20 年 5 月から 7 月にかけて行った益田市隅村町に所在する丸山遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書となります。

隅村町は高津川と匹見川とが相会する地点の東側に位置して、蛇行する匹見川の堆積作用により形成された肥沃な農業地帯といえます。昨年度の調査からは、中世期に係る多くの遺構や遺物の検出などにより近世期まで続く小集落の営みが指摘されたことに加え、さらにその周辺からは原始・古代にまで遡る多くの遺物が確認されたことで、このたびの調査成果も含めると、永い期間に亘る人間活動の営みが明らかとなってきました。

本書は、本地区では2回目となる発掘調査の概要をまとめたものですが、こうして古文書等にも遺されていない歴史の一部が判明した成果を、地域の歴史や文化財保護に対する理解と関心を深めるうえで広くご活用いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたって全面的にご協力をいただきました隅地区農業生産基盤生活環境 整備事業推進業議会をはじめ、土地所有者、地元自治会、事業主体者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 22 年 3 月

益田市教育委員会 教育長 三浦正樹

例 言

本書は 2008(平成 20)年度に、益田市教育委員会が島根県益田県土整備事務所の委託を受け実施した 経営体育成基盤整備事業隅地区に伴う丸山遺跡の発掘調査報告書である。

- 1. 発掘調査は平成 20 年 5 月 27 目から同年 7 月 17 日まで行っている。また同年 6 月 18 日には市内 中西中学校の生徒を対象とした発掘体験を、同年 7 月 19 日には地元住民への調査成果の報告を目 的とした現地説明会をそれぞれ行った。
- 2. 調査に要する経費は92.5%を島根県益田県土整備事務所が負担し、農家負担分である7.5%については国庫補助事業市内遺跡発掘調査等で負担した。
- 3. 発掘調査を行った地番は島根県益田市隅村町148番地1外である。
- 4. 調査は下記の体制で行った。

調査主体 益田市教育委員会

事 務 局 益田市教育委員会文化財課

調査員同主任山本浩之

調查補助員 同嘱託職員 寺戸淳二

調查指導 島根県教育庁文化財課 是田敦

調 查 助 言 元島根大学教授 田中義昭

- 5. 調査に従事していただいた方々は次のとおりである(敬称略)。
 - ○発掘調査作業

石川信義、糸賀義人、桐木達也(中西中学校-発掘体験)、椋 悟、椋 務、村上博一、籾山泰廣 ○室内整理作業 青木仁美

- ○遺物実測・トレース化作業 田中義昭氏主宰「いなか舎」舎員 井上喜代女、福原恭子、藤原 舞
- 6. 挿図中の方位は磁北を示す。また遺構略号のPは柱穴状遺構を示し、現位置法により採り上げた遺物についてはNo(Poと同義)を付記して表示している。
- 7. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は益田市教育委員会で保管している。
- 8. 本書の挿図は青木及びいなか舎が担当し、編集及び執筆は山本が行った。

本 文 目 次

写 真 図 版 目 次

1. 調査	査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・	1	図版 1-1	西側からみた調査地点(遠景)・・	26
2. 遺跡	かの位置と歴史的な環境 ・・・・・・・・	2	- 2	西側からみた調査地点(近景)・・	26
3. 調査	室の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5	- 3	D-b調査区5層の表出状況・・・・・・	26
(1) 訓	間査区の設定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5			
(2) I)ーa調査区の調査状況 ······	9	図版 2-1	D-c調査区4-B層の表出状況・・・・	27
(3) I)-b調査区の調査状況 ····・・・・・	10	- 2	D-a調査区6層の表出状況・・・・・・	27
(4) I)-c調査区の調査状況 ・・・・・・・・	12	- 3	D-b調査区7-B層の表出状況・・・	27
4. 出土	二遺物と周域の採取遺物 ・・・・・・・	14			
(1)	はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	14	図版 3 - 1	D-c調査区 5・6 層の表出状況・・・・	28
(2)		16	- 2	D-a調査区の土層堆積状況(北壁)	28
(3) 厝	引域からの採取遺物 ・・・・・・・・・・・	22	- 3	D-b調査区の土層堆積状況 (西壁)	28
5. 小	結	25			
			図版 4-1	D-c調査区の土層堆積状況(北壁)	29
	挿 図 目 次		- 2	Po06(須恵器・横瓶)の検出状況・	29
			- 3	Po12(土師器·坏)の検出状況···	29
写真 1	空中から俯瞰した隅村町 ・・・・・	1			
第1図	遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	$2^{\frac{1}{2}}$	図版 5 - 1	Po13(青磁・碗)の検出状況・・・・・	30
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡分布図・	3	- 2	発掘体験風景	30
第3図	調查区配置図	5	- 3	発掘作業風景・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	30
第4図	地区名図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5			
第5図	土層断面図(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6	図版 6-1	P01の検出状況(D-c調査区)・・・	31
第6図	土層断面図(2) · · · · · · · · · · ·	7	-2	下位層の確認状況(試掘坑4)・・	31
第7図	土層断面図 (3)	8	- 3	流木の検出状況(試掘坑2)・・・・	31
第8図	土層断面図(4)	9			
第9図	土層断面図 (5) · · · · · · · · · · ·	10	図版 7 - 1	D-a調査区の完掘状況 (西から)	32
第10図	調查区平面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	11	-2	D-b調査区の完掘状況 (東から)	32
第11図	出土遺物実測図(1)	15	- 3	D-c調査区の完掘状況 (南から)	32
第12図	出土遺物実測図(2)	17			
第13図	出土遺物実測図(3)	19	図版 8 - 1	遺跡の完掘状況(東から)・・・・・・	33
第14図	出土遺物実測図(4)	21	- 2	遺物採集地点を望む・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	33
第15図	出土遺物実測図(5)	22	- 3	施工後の調査地点(西側から)・・	33
第16図	採取遺物実測図	23			
第17図	俯瞰した事業範囲地形図 ・・・・・	25	図版 9-1	実測遺物 1 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	34
			-2	実測遺物 2 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	34
	表目次		- 3	実測遺物 3 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	34
第1表	周辺の遺跡一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3	図版10-1	実測遺物 4 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	35
第2表	遺物集計表	14	-2	実測遺物 5 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	35
第3表	実 測遺物観察表 ······	18	_ 3	実測遺物 6 (採取遺物)······	35

1. 調査に至る経緯

平成 19 年度には隅地区経営体育成基盤整備事業に伴い、隅村町で初めてとなる本調査を実施して、おもに中世期に係る遺構や遺物の検出状況から、主に中世期から近世期に至る集落の営みを確認されていたところである。

一方、その調査と同時に周域の遺物表面採取調査を行った結果、北側直下の耕作地を中心として弥生 土器や土師器、須恵器、貿易陶磁器などの原始から中世に至る遺物が多く散見されたため、文化財保護 の観点から事業者である島根県益田県土整備事務所あてに平成20年4月8日付け益教文第13号をもっ て発掘調査の必要性を協議している。

これを受けた事業者は、同地が開発予定地内であり事前に発掘調査が必要との承諾をふまえ、平成20年4月18日付け益整第1244号の埋蔵文化財の通知を、益田市教育委員会経由で島根県教育委員会教育長あてに送付し、同様に同教育長からの勧告(平成20年5月1日付け島教文財第2号の7)を事業者所長あてに通知している。

こうして益田市教育委員会は、島根県教育委員会教育長あてに平成 20 年 5 月 16 日付け益教文第 54 号をもって埋蔵文化財発掘調査の着手を通知し、事業者とは平成 20 年 5 月 19 日付けで委託契約書の締結のうえ、平成 20 年度農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う本発掘調査を平成 20 年 5 月 27 日から着手し、工事着手予定の同年 8 月初旬を 10 日間以上残して、同年 7 月 17 日には調査を終了している。

なお同年 6 月 18 日には、職場体験として益田市立中西中学校 3 年生(当時)の桐木達也氏に発掘を体験して頂いた(図版 5-2)とともに、同年 7 月 3 日には島根県教育庁文化財課 是田氏に調査指導を受けている。また地元の方々を中心に調査成果を識って頂くために同年 7 月 19 日には現地説明会を開催して、猛暑日に拘わらず多くのご来場を頂いたのであった。

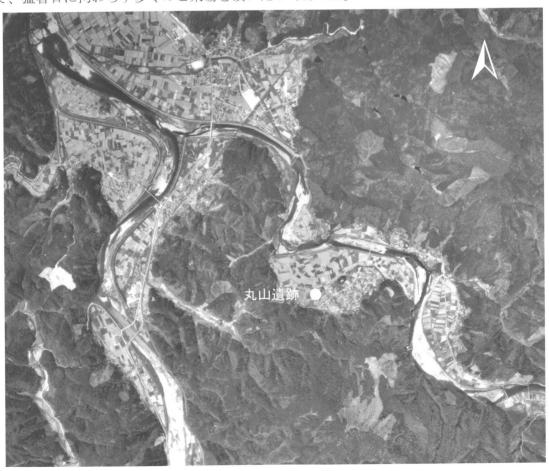


写真1 空中から俯瞰した隅村町(国土地理院所管)

2. 遺跡の位置と歴史的な環境

(1)遺跡の位置

益田市は島根県の西端に位置しており、益田川、高津川両河川によって形成された平野上に広がる市街地を中心として、平成 16 年 11 月 1 日の旧美都町・旧匹見町との合併によりその市域は拡大して、現在(平成 21 年 12 月末)面積約 733 k ㎡、人口約 51,000 人を有する都市となっている。東は浜田市、南は津和野町と吉賀町及び広島県安芸太田町と北広島町、西は山口県萩市田万川町に接し、北は日本海に面して島根県西部では中核都市の 1 つとして機能している。



丸山遺跡の所在する隅 村町は市内中央西寄りの 津和野町側に位置し、高 津川と合流する匹見川の 下流域に広がる平野部で 穀倉地帯となっている。

現在は隅村町、神田町、 向横田町、白岩町、薄原 町、猪木谷町で構成され る『西益田(行政)区』のう ちの『高城地区』に組み 込まれ、隅村町は人口 329 人、世帯数 115 戸(平成 20年2月時点)を数えて、 匹見川を境に隅、赤松の 2自治会区に分かれてい る。本遺跡は前者により で見川のされてきたと云われて いる。

(2) 歴史的な環境

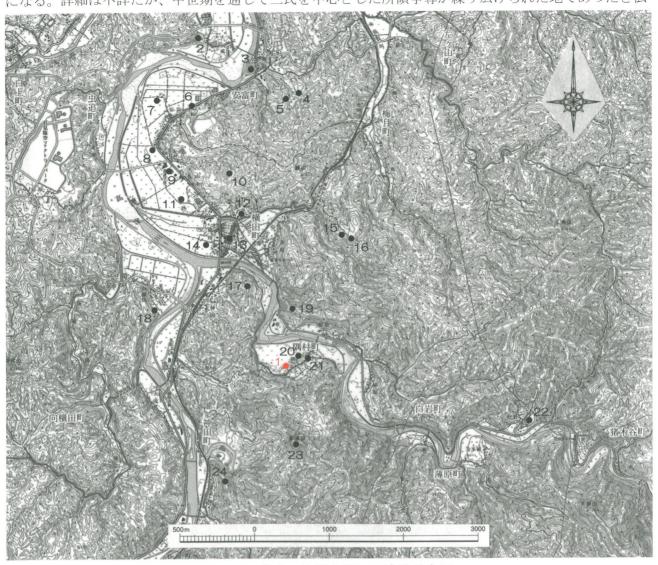
本遺跡の所在する『高城地区』には原始~古代に係る顕著な遺跡は見受けにくいようであるが、むしろ隅村町から北西域にあたる『西益田(行政)区』のうちの『豊田地区(横田町、安富町、梅月町、本俣賀町、左ヶ山町)』に今のところ多くが散見できるようである。

市内の縄文遺跡は縄文銀座といわれる匹見町の他には、周辺では安富町の安富王子台遺跡から縄文後期後半〜晩期に至る土器が発見されている。また弥生時代には同遺跡から弥生前期土器や、その至近の羽場遺跡では弥生中期土器の多数出土した環濠や土坑墓、中小路遺跡では弥生中期〜後期に係る遺物に伴う竪穴住居跡や土器棺墓など、そして横田町の家下遺跡からは弥生終末期土器などが多くみられて、高津川中流域平野には永続した大集落の営みを窺うことができる。

古墳時代に入ると、『豊田地区』では奥田古墳群(円墳)や上野横穴などがみられ、また律令制下では市域に『美濃郡』の誕生をみるが、八郷に分割されるうちの『大農(おおの)郷』に現在の『西益田(行政)区』の大部分が相当すると考えられる。そして平安末期以降は『長野庄』などの荘園へと推移していく過程の中で、前述の中小路遺跡からは官衙的要素の強い遺構群も検出されるなど地域拠点的な集落様相を窺わせるとともに、家下遺跡でも奈良~平安期に係る遺物などが多くみられている。

鎌倉以降の中世期には、益田氏や吉見氏及び諸氏の入部に従って同地にも彼らの所領支配が及ぶよう

になる。詳細は不詳だが、中世期を通じて二氏を中心とした所領争奪が繰り広げられた地であったと伝



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

第2回 遠跡の世間と同題の遠跡が刊回											
番号	名 称	種別	概要	番号	名 称	種別	概要				
1	丸山遺跡	集落跡	弥生、古代~中世、近世	13	中世横田市遺跡	その他					
2	大嶽城跡	城跡	山城、郭、竪掘、横掘	14	中原遺跡	散布地	陶磁器				
3	安富城跡	城跡	山城、郭、竪切	15	石塔寺権現経塚	神社跡					
4	長原屋敷跡	館跡		16	石塔寺権現境内跡	神社跡					
5	奥田古墳群	古墳	積石塚円墳	17	本郷寺城跡	城跡	山城、郭、掘切、竪掘				
6	羽場遺跡	集落跡	弥生前~中期、中世	18	向横田城跡(市指定)	城跡	山城、郭、土塁、空掘、				
							掘切				
7	中小路遺跡	集落跡	弥生中~後期、奈良~平安	19	井出カケの城跡	城跡	山城、郭、土塁、掘切				
			中世前半期								
8	安富王子台遺跡	散布地	縄文土器、弥生土器、石器	20	丸山の樫(市指定)	天記	隅丸山八幡宮境内				
9	大畑遺跡	集落跡	陶磁器	21	隅村窯跡	窯跡	近代以降				
10	豊田城跡	城跡	山城、郭	22	久木遺跡	散布地	朱壷、宝珠				
11	家下遺跡	集落跡	弥生終末期、奈良~平安	23	高浪山城跡	城跡	山城、郭、掘切				
12	上野横穴	横穴	須恵器、刀剣	24	三星城跡	城跡	山城、郭、掘切				

第1表 周辺の遺跡一覧

えられ、最終的には益田氏に帰したという。同周域には安富城跡、豊田城跡、本郷寺城跡、向横田城跡、 三星城跡、また遺跡の南側には斎藤隠岐守が築城したと伝える高浪(こうなみ)山城跡などの山城がみ られ、彼らの残跡を偲ばせている。

なお、中小路遺跡や羽場遺跡などから出土した多くの貿易陶磁器類や石塔寺権現経塚出土の鎌倉初期頃と推定される中国製陶製経筒(豊田神社蔵、県指定文化財)などからは、当該期における土豪(地侍)級勢力の存在や流通・交易の様相、そして仏教文化の浸透状況などを窺える好資料といえよう。一方、遺跡の北東約200m地点の小高い丘に所在する隅丸山八幡宮は、正治年間(1199~1200)に勧進後、天正13年(1585)に再度造営を行ったとされるが、その際記念に境内に植樹されたといわれるイチイガシは市指定天然記念物となっている。

藩制期に入ると、他所へ転封となった益田氏や吉見氏の旧領地はそれぞれ浜田藩領・津和野藩領に再編されることになり、本遺跡の所在する『高城地区』は江戸期を通じて後者に属することとなった。また洪水禍については既述のとおりで、宝暦3年(1753)の大洪水による被害の甚大さや、翌年度の水除の完工、そして明和3年(1766)の新田床の開発などが記録に遺されている。なお近代以降では、本遺跡の至近東側に隅村窯跡が確認されている。

参考文献:矢富熊一郎『益田市史』昭和38年発行

矢富熊一郎ほか『益田市誌(上巻)』昭和50年発行

『日本歴史地名大系第三三巻 島根県の地名』平凡社 1995 年発行

沖本常吉『日原町史(上巻)』昭和39年発行

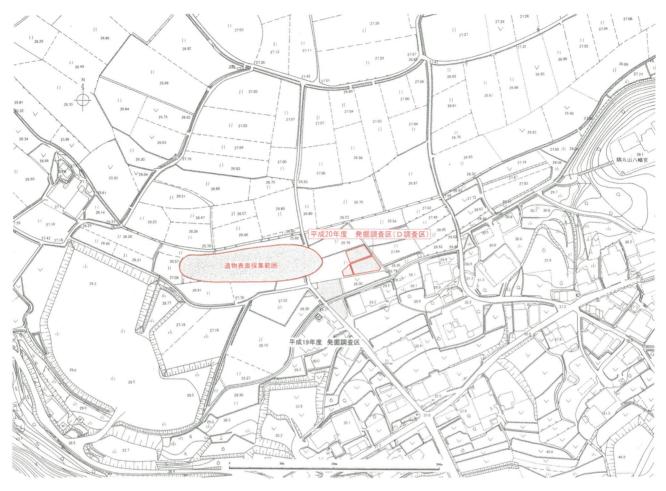
沖本常吉『津和野町史(第一巻)』昭和45年発行

石西郷土史及び税史編集委員会『石西ものがたり』租税とくらし 平成 10 年発行

3. 調査の概要

(1)調査区の設定

調査対象地は、島根県益田市隅村町148番1ほかに所在し、そこは地名でいう丸山および家ノ下と



第3図 調査区配置図

いわれる場所である。昨年度には隣接する上段部の調査を行っていることから、同遺跡として扱い丸山 遺跡と称名することとした。

当該地域は、北方向約 300m 地点を西流する匹見川によって形成された広範な平野であり、肥沃な穀倉地帯であることは前述のとおりである。河川は蛇行しながら高津川に合流し、その右岸には国道 488

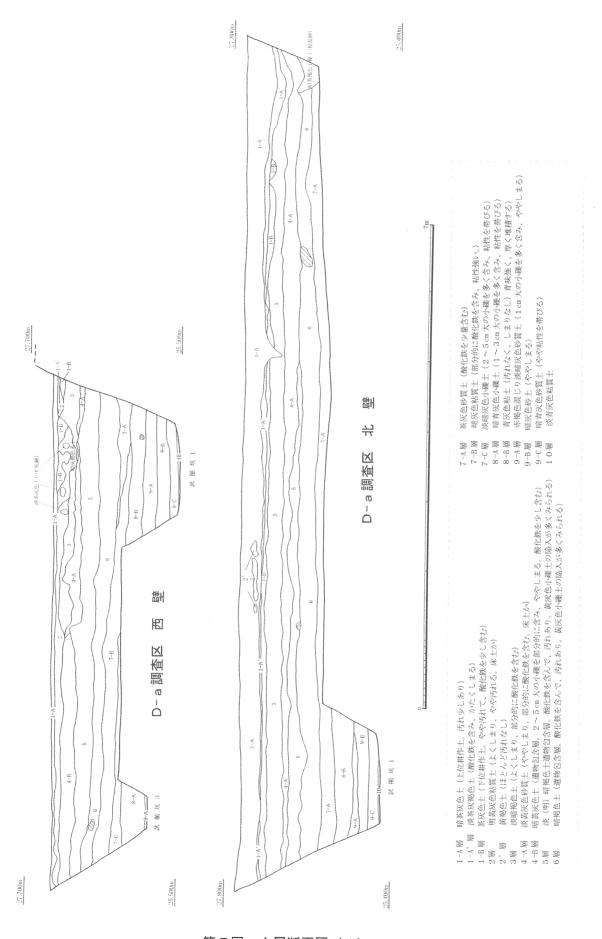


号線が東西方向に貫通して横田方面に至る。

一方、南側背後には山地が迫って、なだらかに派生する山麓域には居住区が形成されている。山麓に沿って隅村橋から市道神田隅線が弧状に貫道し、国道9号線に合流する。

調査地点はこの平野部と住宅地との境界付近に位置するもので、平成 19 年度の調査面よりも北方向に 1 段ほど下がった地点に所在し、現地表面標高は $27.200m\sim27.600m$ 、匹見川との比高差約 2.0m を測った水田地に立地している(第 $2\sim3$ 図・図版 1-1)。

なお同地点の西側には、約 2m 幅の工事用水 路が既設されており、西側から逆 L 字状に北流



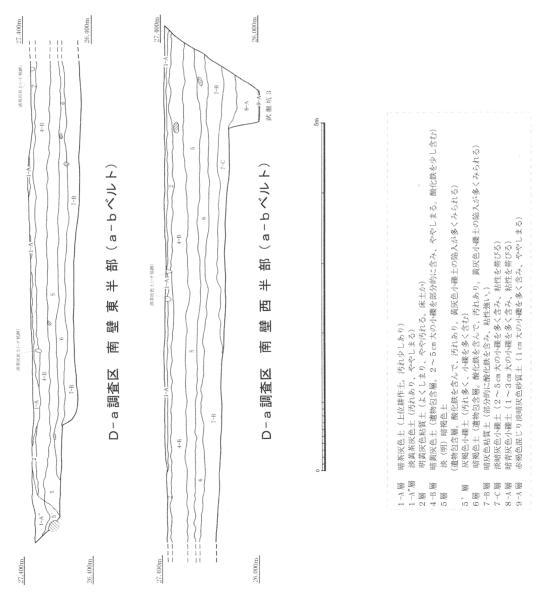
第5図 土層断面図(1)

している状況であった(第4図・図版1-2)。

調査区の設定にあたっては第一に水路に留意し、また調査区名については昨年度と同遺跡としてアルファベットの続きの D 調査区から始めることとした。実際には水路の崩壊を防ぐためにその端部から $1.5 \text{m} \sim 2 \text{m}$ の距離を保つこととし、まずはそれ以東から設定している。

最初に水田の北側畦畔の西端部から 1.5m地点を基点として、北端線と平行に北側上端約 12m、また直交した南方向に西側左端約 15mを設け、次いで東・南端畦畔に沿って、それぞれ東側右端約 17m・南側下端約 16mを測った台形状の調査区を設定した。この時点で調査対象区の大半を占め、さらに北側上端と平行して中央部に 0.5mのセクションベルトを設けて 2 分割し、北側を D-a 調査区、南側を D-b 調査区としている。

最後に水路寄りの南側余地には、水路端部から 2mの距離をもって南端畦畔に沿うように台形状の小区を設定して D-c 調査区とし、D-b 調査区間には同様にしてセクションベルトを設けている。このセクションベルトについては、D-a-b 調査区間のものを a-b ベルト、D-b-c 調査区間を b-c ベルトとそれぞれ称名することとした(第 4 図)。



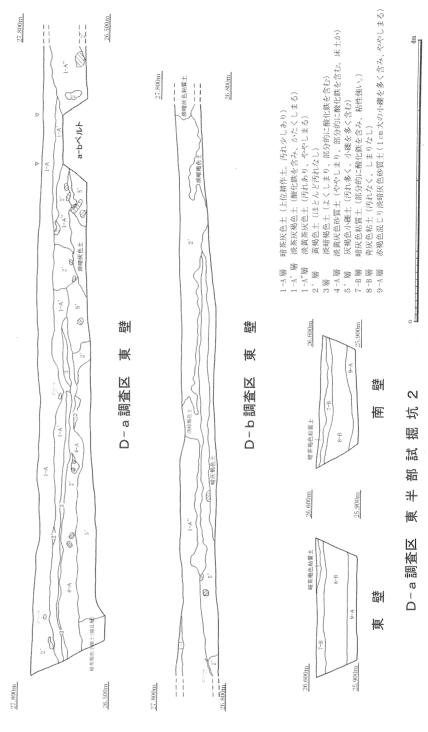
第6図 土層断面図(2)

発掘調査は短期間での完了を目標として重機を併用しながら進め、まずは重機で 1-A 層 (表土)除去を行い、人力作業を中心に精査を行った。最終的には D-a 調査区を約 100 ㎡、D-b 調査区を約 140 ㎡、

D-c 調査区を約30㎡の計約270㎡の掘削面積をもって調査を完了している。

なお、以降に各調査区の概況を述べていくが、本遺跡においては、1-A層:暗茶灰色土(上位耕作土。

汚れ少しあり)、1-A'層:淡 茶灰褐色土(酸化鉄を含み、 かたくしまる)、1-A"層:淡 黄茶灰色土(汚れあり、やや しまる)、1-B層:茶灰色土 (下位耕作土。やや汚れて、 酸化鉄を少し含む)、2層:明 黄灰色粘質土(よくしまり、 やや汚れる。床土か)、2 層 : 黄褐色土 (ほとんど汚れな し)、3層:淡暗褐色土(よく しまり、部分的に酸化鉄を含 む)、4-A層:淡黄灰色砂質 土(ややしまり、部分的に酸 化鉄を含む。床土か)、4-B 層:暗黄灰色土(遺物包含層。 2~5cm大の小礫を部分的に 含み、ややしまる。酸化鉄を 少し含む)、5層:淡(明)暗 褐色土(遺物包含層。酸化鉄 を含んで、汚れあり。黄灰色 小礫土の陥入が多くみられる) 5 層:灰褐色小礫土(汚れ 多く、小礫を多く含む)、6層 : 暗褐色土(遺物包含層。酸 化鉄を含んで、汚れあり。黄 灰色小礫土の陥入が多くみら れる)、7-A層:茶灰色砂質 土 (酸化鉄を少量含む)、7-B 層:暗灰色粘質土(部分的に 酸化鉄を含み、粘性強い)、7 -C層:淡暗灰色小礫土(2~ 5 cm 大の小礫を多く含み、粘 性を帯びる)、8-A層:暗青 灰色小礫土(1~3 cm 大の小



第7図 土層断面図(3)

礫を多く含み、粘性を帯びる)、8-B 層: 青灰色粘土 (汚れなく、しまりなし)、9-A 層: 赤褐色混じり淡暗灰色砂質土 (1 cm 大の小礫を多く含み、ややしまる)、9-B 層: 暗灰色砂土 (ややしまる)、9-C 層: 暗青灰色砂質土 (やや粘性を帯びる)、10 層: 淡青灰色粘質土、11 層: にぶい黄褐色粘質土 (地山土。汚れ多く、しまる。酸化鉄多く含む)という統一的な基本的層序に加えて、暗渠部については、①層: 淡灰褐色砂質土 (暗渠排水埋土。しまり弱い)、②層: 黄灰褐色粘質土 (暗渠排水埋土。やや汚れて、しまり弱い)、③層: 灰褐色砂質土 (しまり弱い)という分層状況の基に考察を行っている。

(2) D-a 調査区の調査状況

本区は D 調査区の北側にあたり、他区に比べて最も深度を測る調査区である。基本的層序は、1-A 層の暗茶灰色土(上位耕作土)、1-A 層の淡茶灰褐色土、1-A 層の淡黄茶灰色土、1-B 層の茶灰色土 (下位耕作土)、2 層の明黄灰色粘質土(床土か)、2 層の黄褐色土、3 層の淡暗褐色土、4-A 層の淡黄灰色砂質土(床土か)、4-B 層の暗黄灰色土(遺物包含層)、5 層の淡(明)暗褐色土(遺物包含層)、5 層の灰褐色小礫土、6 層の暗褐色土(遺物包含層)、7-A 層の茶灰色砂質土、7-B 層の暗灰色粘質土、7-C 層の淡暗灰色小礫土、8-A 層の暗青灰色小礫土、8-B 層の青灰色粘土、9-A 層の赤褐色混じり淡暗灰色砂質土、9-B 層の暗灰色砂土、9-C 層の暗青灰色砂質土、10 層の淡青灰色粘質土という堆積状況であった(第5・6・7 図)。

2~5cm 大の小礫を部分的に含み 遺物包含層。酸化鉄を含んで、汚れあり, 黄灰色小礫土の陥入が多くみられる) (部分的に酸化鉄を含み、粘性強い。 酸化鉄多く全む) b-cベント 暗茶灰色土(上位耕作土。 暗黄灰色土(遺物包含層。 級 **培育灰色粘膜** 恕 # 展 拙 榧 恕 M D-b調査 # 田 棩 쎎 匨 榧 X 区 匌 查 靨 # O Ω 0 0 27.500m 27.000m

第8図 土層断面図(4)

このうち1層から4-A層までは田圃もしくはそれに伴う 圃場整備(耕地造成)の層位と捉えられ、耕土や床土層の互 層状況もみられるように、少なくとも過去に2度は実施され たと推定されて、その痕跡は区の北半に顕著であった。第5 図の西壁中央には3層及び4-A層の尖滅部分がみられて、そ れが旧畦畔境を示し、本区を二分する耕地の可能性を窺える ものであった。

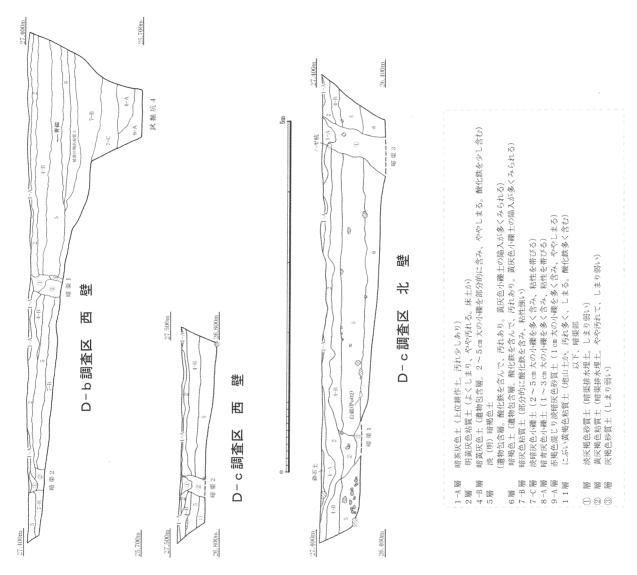
出土遺物は 4-B 層からみられ始め、 $5\cdot 6$ 層で増加して、7-B 層で徐々に減少するといった様相が窺えた。このうち 4-B 層は南半部に限られるもので、層厚は南側に厚く $25\,\mathrm{cm}$ 前後を測り、北方向に向かい薄層となる。5 層は西側及び南側に厚く $20\sim30\,\mathrm{cm}$ を測って北方向に薄く、北半から東側に向かっては尖滅するが、その分 4-A 層が厚く堆積する傾向にある。逆に 6 層は北側に厚く 30 cm 前後を測って、南側に向かいやや薄くなる。本層には須恵器 (Po04) や土師器 (Po12)、青磁碗 (Po08) などの遺物も含んでいる (第 10 図)。

以上までの土層のうち、4層は比較的汚れはなく、逆に5・6層は汚れが多く、含まれる小礫は南側(もしくは南西側)に増加する傾向にあり、また黄灰色土ブロックの陥入や遺物の含入も多くみられることから、この2層については撹乱を伴う搬入(造成)土の可能性が高いものと考えている。

ここで東側に転じると、第7図のとおり過度の撹乱を呈した様相が見受けられる。多くは上・下層が混在したものと捉えられるが、東端部外側には水田用水路が敷設されており、その施工の際に生じた堆積層と考えている。

また7層から10層にかけては、ほとんどが無遺物層として捉えられた。7層は三つに分層されるが、A層は茶味帯びる砂質土で北端直前から発生し、本層以降から粘質性が強くなって汚れも無くなる傾向にある。B層は青味帯びる小礫層で、北端直前で尖滅する。この2層までで僅かに遺物がみられている。C層は灰味帯びる小礫層で、西側に厚く中央あたりで尖滅する。次いで8層も二分層するが、主に小礫と粘土の含有の違いのみで、いずれも青味帯びて類似するもの。

また 9 層も三分層するが、いずれも砂(質)性で類似する。そして 10 層は 8 -B 層に類似する粘質土であった。この $7 \sim 9$ 層は南西側からの緩やかな傾斜に従って堆積する状況が看取されるとともに、流木 1 が 7 -B(もしくは 7 - c)層に、流木 2(試掘坑 2)も 8 -B 層にみられることなどから、 7 層以下の土層については試掘坑 $1 \sim 3$ により、湿地もしくは河の影響による堆積層であり、時代は不詳であるが、至近にまで河が寄っていたものと判断された(第 10 図)。

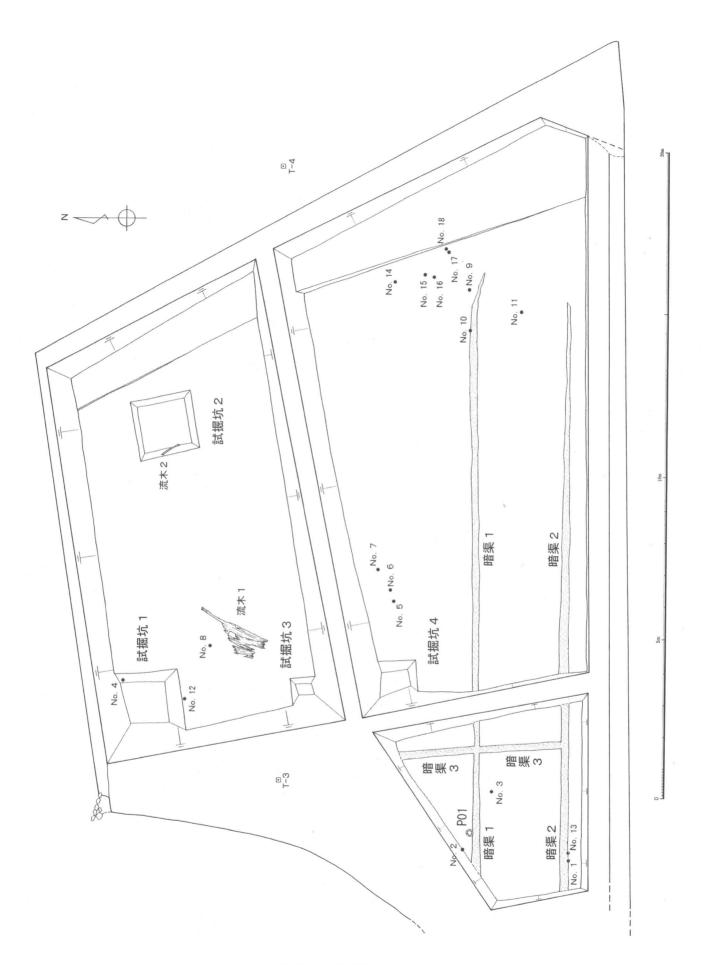


第9図 土層断面図(5)

(3) D-b 調査区の調査状況

本区は南側に位置して高位であり、最も遺物の多出した調査区(とくに北半域)となる。基本的層序は、1-A 層の暗茶灰色土(上位耕作土)、1-A″層の淡黄茶灰色土、2層の明黄灰色粘質土(床土か)、2 層の黄褐色土、4-B 層の暗黄灰色土(遺物包含層)、5層の淡(明)暗褐色土(遺物包含層)、5 層の灰褐色小礫土、6層の暗褐色土(遺物包含層)、7-B 層の暗灰色粘質土、7-C 層の淡暗灰色小礫土、8-A 層の暗青灰色小礫土、9-A 層の赤褐色混じり淡暗灰色砂質土を呈して、土質は D-a 調査区に準じ、また暗渠部は①層の淡灰褐色砂質土、②層の黄灰褐色粘質土、③層の灰褐色砂質土などの埋土と捉えられるものであった。

第9図で西壁をみると、全体的に南側に薄く、北方向に厚く堆積しているが、とくに4-B層から7-B層までで層種や層厚の増加は顕著であり、よって原地形(地山層)は南側(高位地)から北方向に緩傾斜を呈するものと推察される。この変位していく土層群はいずれも遺物包含層で、基本的にはD-a調査



第10図 調査区平面図

区に準じるものであった。

このうち4-B層は暗渠1を挟み、ほぼ水平に最大層厚20cmを測って北半域に堆積する。遺物は僅少だが、北半に集中する様相がみられる。5層から遺物が増え始め、地形に沿って北側へ緩傾斜する。層厚10~20cmを測り、青磁などの貿易陶磁器や須恵器・土師器などの遺物がみられるようになる。また6層は北半端域のみにみられ、それ以降南側へは尖滅する。下層は暗基灰褐色粘質土で恐らくは上・下層との混合土である。両者とも遺物包含層で、須恵器の甕・碗・横瓶(Po05・06・07)などが確認されていて、後者は本区のみにみられるものであった。

7-B 層は D-a 調査区と違い遺物が多くみられて、なかには僅かに弥生土器などもあれば、須恵器や貿易陶磁器もみられるなど、本区に限らず遺物包含層には時期の混在状況が多く見受けられるようである。本層も地形に沿って南側に薄く、北側で最大層厚 40 cmを測って厚く堆積するが(第8・9図)、この本域においては大きく皿状に深まりをもった様子が看取されて、一種の河もしくは湿地(沼)などの淀み的な場所と推定できるとともに、遺物も密集する状況が窺えて興味深い。一方、南端域は側溝の水の影響か青味を帯びて変色し、また図示はしていないが南域の本層下位は地山層に変わり堅くしまり、この層位は前述の皿状端部手前付近から北側に向かい、さらに低位へと降下していくものと想像された。

この 7-B 層の下位にまで至ると、遺物はみられなくなった。この時点で試掘坑 4 を設け、他区と同様に下位の状況を調査してみたところ、D-a 調査区と同様の無遺物層(7-C 層・8-A 層・9-A 層)の確認により、河等の影響による堆積層であるとして以降の掘削を止めている。

なお東側については第7図でみられるように撹乱的様相が強く、その理由は前述のとおり D-a 調査区 と同様である。但し、本区の東壁下層の暗灰褐色土は 6層に類似するもので、その下位レベルの 26.800 m位からは東半域に集中して須恵器 (P009~10·14~18) や青磁碗 (P011) などの遺物も確認されている。

一方、遺構については第9図及び図10図のとおり、D-c調査区から延びる暗渠1と2を確認できた。 南域において、南端に対し2条の平行線状に東壁付近まで延びるが、いずれも 30~40 cmの幅をもって 最後には尖滅するもの。水田等の排水用地下埋設溝と考えられ、検出面は1-A 層下面で、7-B 層を貫通して地山層まで到達している。暗渠内部には、小枝をびっしりと充填して、枝身は白く水分をよく保 つものであった。これらのことから、比較的新しいものと解され、恐らくは近代(明治?)以降のものと 判断されたので、暗渠内部は掘削せずに表出して清掃のみで止めている。 陥入埋土は三層ほど確認され たが、上・下層は砂質性及び中層は粘質性を帯びた封土であり、水捌けを考慮したものかもしれない。 いずれにしても本地点域において、近年までの数次に係る水田造成の一端を窺えるものであった。

(4) D-c 調査区の調査状況

本区は南西側にあたり、D 調査区のうち最小で、精査も早くに完了した地点である。基本的層序は、1-A 層の暗茶灰色土(上位耕作土)、2層の明黄灰色粘質土(床土か)、4-B 層の暗黄灰色土(遺物包含層)、5層の淡(明)暗褐色土(遺物包含層)、6層の暗褐色土(遺物包含層)、11層の鈍い黄褐色粘質土(地山土)、また暗渠部では①層の淡灰褐色砂質土、②層の黄灰褐色粘質土、③層の灰褐色砂質土を呈して D-b 調査区に準じている。

南端部は第8図のとおり、1-A 層と4-B 層は西端に僅かに残る程度で、その大半は5 層で占めている。また第9図では北側に向かい2 層の発生と4-B 層がやや厚みをもって堆積する状況を看取でき、この4-B 層から遺物がみられ始める。次ぐ5 層は遺物を多く包含するようになり、下位部には須恵器 (Po01)や白磁碗(Po02)、土師器(Po03)、青磁碗(Po13)などが確認されて、時期差をもって混在した出土状況を示している(第10図)。

この 5 層は南西側に向かって高位に推移するが、D-b 調査区と同様に原地形に沿うものであり、西壁南端隅では地山層となる 11 層もみられている。但し、北側へ向かうにつれ 5 層との間には 6 層が確認されて、遺物を僅かに伴出しながらも厚みをもって D-a-b 調査区へと続いている。直下の 11 層地山層

は堅く締り、平成 19 年度調査地方向から北及び北東方向に向かって、緩傾斜する状況が窺えたものであった。

なお遺構は、柱穴状のものが 1 基(P01)ほど 6 層と地山層との層界面に確認されている。形状は皿状を呈して、検出面標高 26.76m、深度 0.11m、径は 0.2mを測って共伴遺物はなく、判断の難しいものであった。また 1 一A 層及び 2 層直下からは暗渠 1 と 2 が検出されて、その性格は D-a 調査区と同質のものである。さらに東端寄りには両者に直交して暗渠 3 も確認されるが、こちらも同質であり、陥入土の封土状況からはやや新しいものと判断されるが、いずれにしても時期幅の狭い近代以降のものとして捉えられた(第 10 図)。

本遺跡地は調査状況から推察すると、原地形として南西側から緩やかに派生する傾斜地に対して、時には削平して平地とし、あるいは数次に係る搬入や造成を行うなどの可耕地として活用されてきたものと考えられ、下位層から僅かにみられる弥生土器や土師器・須恵器・貿易陶磁器などの存在からは、旧くからの人間にとっての生活好地であった状況を窺えるものであった。

4. 出土遺物と周域の採取遺物

(1) はじめに

本発掘調査では、基本的には土層ごとに遺物を一括して採り上げているが、特徴的なものについては Po 遺物(No 遺物と同義とする)として元位置記録法に従った採り上げを行っている。また、それ以外にも遺跡周域で採集したものがある。

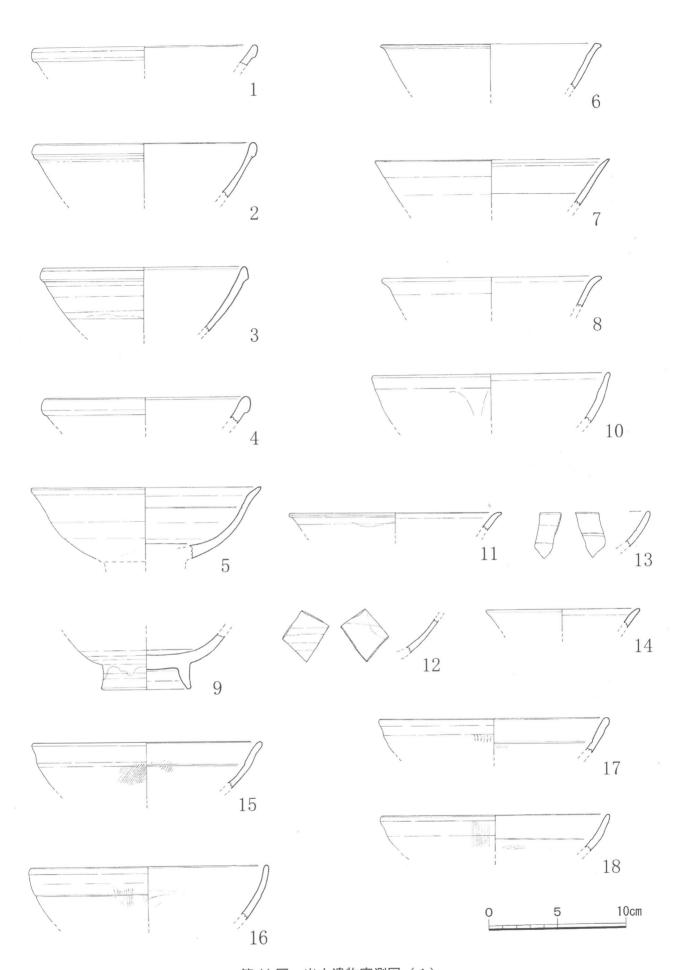
第2表のとおり、本遺跡から出土した遺物総数は1,200 点余りを数えて、その内訳は土師器の684点(56.3%)が最も多く、次いで須恵器の238点(19.6%)、青磁131点・白磁64点・褐釉陶器1点で構成される貿易陶磁器類の196点(16.1%)、そして国産陶磁器の73点(6.0%)であり、ここまでで全体の97.9%を占めている。この他、僅少ではあるが、弥生土器8点、瓦質土器6点、土錘3点、鉄製品(鉄滓など)3点もみられて幅広い時期差を窺えるものであった。

本遺跡では顕著な遺構は未検出であることから、当該期に係る具体的な生活址は浮き彫りにはできず、また遺物の出土した層位についても撹乱を帯びた搬入造成土の様相が強いものであって、数次の削平状況も看取できるものであった。このことにより、出土遺物から遺跡の性格を推察していくことになるが、その大半は中位層から下位層にかけて時期が混在して伴出するものの、弥生土器は下位面に集中する様相が窺われた。Po 遺物(全 18 点)も主に下位層に検出されたもので、須恵器甕の大片のほか、青・白磁碗や土師器坏なども確認されている。

遺物の構成時期は、弥生土器の弥生時代(中期~後期)に始まり、土師器・須恵器などの奈良時代~平安時代前期を主体とするもの、また貿易陶磁器(青磁・白磁など)の平安時代後期~鎌倉時代を主体とするもの、そして国産陶磁器類などの近世期以降のものに大別されるが、数量からみれば奈良時代から鎌倉時

〈D-a区〉	土師器	須恵器	東播系須恵器	青磁	白磁	褐釉陶器	国産陶磁器	弥生土器	瓦質土器	土錘	鉄製品	種子	木材	炭化物	ät
1-A層	3	3		3	5		19				1				34
2層 4-B層	,	,		1 8			10								1
5層	27		'	5	6		12		1						31
5'層	1	1		٦	1				'						47
6層	77			10	7		3						1		113
7-B層	15	3						2				1	'		21
(İ		 		
〈D-b区〉	125		1		21	0	34	2	2	0	1	1	1	0	249
1-A層 4-B層	2 4			8	4		19								41
5層	75			15	5		1								18
5'層	20			3	3		1		1						122
6層	203			40	18		4		2	1				2	29 344
7-B層	107	51	2	16	7		4	6			1			1	195
()															
〈D-c区〉 4-B層	411	4	2		37	0	31	6	3	1	1	0	0	3	749
5層	115			3 17	,	1	6			2					22
6層	26			1/	4		2		1		1				162
		- J													34
小計	148	30	0	21	6	1	8	0	1	2	1	0	0	0	218
計	684	235	3	131	64	1	73	8	6	3	3				1 010
Bossonson consensation and a second	Accession and the Control of the Con						70		L	J	١			3	1,216
周域採取遺物	土師器	須恵器	東播系須恵器	青磁	白磁	褐釉陶器	国産陶磁器	弥生土器	瓦質土器	土錘	鉄製品	種子	木材	炭化物	計
					-		***************************************								
計	258	27	0	15	9	0	107	22	0	1	5	0	0	0	444
£															
合 計	942	262	3	146	73	1	180	30	6	4	8				
Control of the Contro					, 01	***************************************	100	- 30	01	' †	0	1		3	1,660
採上番号	出土区	出土層位	種	類		備考	採上番号	出土区	出土層位	1	重類		(i	請考	
Po01	D-c区	5層	須恵器	碗底	B		Po10	D-b⊠	6層	須恵器塾	ī				
Po02	D-c⊠	5層下面	白磁碗		-	実測図9	Po11	D-b区	6層	有感奋争 青磁碗店	: 部(Po13	上接合)	宇油	図46	
Po03	D-c区	5層	土師器			- 21/11 pane 2	Po12	D-a区	6層	土師器切	底部	CIX D/		図67	
Po04	D-a⊠	6層	須恵器				Po13	D-c⊠	5層下面	青磁碗底	部(Po11	と接合)		図46	
Po05	D-b区	6層	須恵器		ß		Po14	D-b区	6層	須恵器甕			//		
Po06	D-b区	6層	須恵器	横瓶		実測図62	Po15	D-b区	6層	須恵器螴	(Po16ك	接合)			
Po07 Po08	D-b区 D-a区	6層 6層上面	須恵器 青磁碗	瓷如		実測図65	Po16	D-b⊠	6層	須恵器甕	(Po15と	接合)			
Po09	D-a区	6層	東欧帆 須恵器			実測図42 実測図57	Po17 Po18	D-b区 D-b区	6層	須恵器甕					
1 000	J 0 E2	U/8]	/54 /EX 100	M		大州四0/	P018	D-DIZ	6層	須恵器甕	! 				

第2表 遺物集計表



第11図 出土遺物実測図(1)

代までを盛行期として扱うことができる。また後述する周域からの採取遺物も含めると、時期幅と数量もやや広がりをみせ、原始からの人類の営みがみられる本遺跡地は、さらに広がりをもっていた可能性も窺うことができた。以下、特徴的な資料を中心にみていくこととする。

(2) 実測遺物

 $1 \sim 47$ は中世前期の貿易陶磁器類で、 $1 \sim 14$ は白磁、 $15 \sim 46$ は青磁、そして 47 は褐釉陶器である(第 $11 \sim 13$ 図・第 3 表)。

まず白磁は、胎土・釉色ともに灰白色を呈し、 $13\cdot 14$ 以外は碗で口縁部片が多く、9 は高台部片、12 は体部片であった。 $1\sim 4$ の口縁部は玉縁状、 $5\sim 8$ は外反を呈するもので、このうち $1\cdot 4$ の断面は半楕円状を呈して縁下端は折込み、 $5\cdot 7$ の内面には斜目面、6 の端頂部には平坦面をそれぞれ有して、とくに 7 は口禿で端部は尖っている。いずれも体上部は逆「ハ」字状に開くが、 $3\cdot 5$ は内湾気味に、7 は直線的に立ち上がっている。

また 9 (PoO2) は底部片で、小さく外反する高い高台内は無釉(露胎)であり、体部は内湾して立ち上がるもの。 10 は端部がやや尖り気味で外面に釉垂れがみられ、11 は端反りを呈して端部は水平に屈折し、鳥嘴状に小さく突出している。 12 は体下半部片で、内面には弧状文もしくは円弧文を施している。

13・14 は皿と想定されるもので、前者は内湾気味に大きく開いて内面に太い沈線をもち、後者は口縁部がやや外反気味となるものである。

白磁は 10 の碗X I 類が最古のもので、次いで1 は碗II 類、 $2\sim4$ は碗IV類、 $5\cdot6\cdot9$ は碗V類、11 はII II 類、そして 12 は碗X II 類であり、 $7\cdot8$ は碗IX 類及び 14 はIII II 変形を含まれ、11 世紀後半~12 世紀後半を中心とするものである。

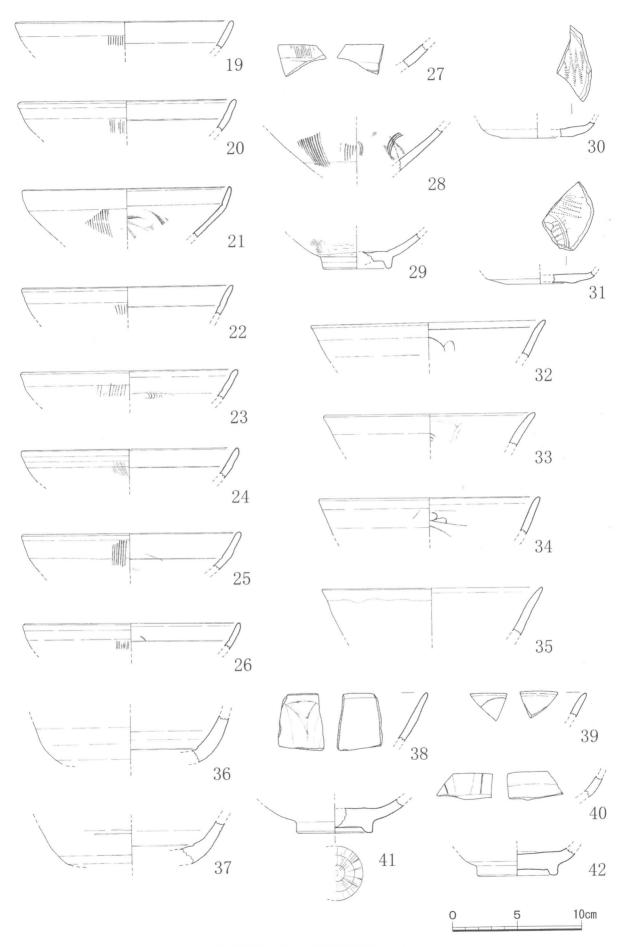
一方、青磁は $15\sim31$ が同安窯系のもので、釉調は灰オリーブ色、胎土は灰白色を呈し、そのうち $15\sim29$ は碗、 $30\cdot31$ は皿である。また $15\sim26$ は口縁部片、 $27\cdot28$ は体部片、 $29\sim31$ は高台部片であり、 21 は口縁部にて逆「ハ」字状に屈曲して立ち上がり、25 も緩い屈曲をなす。そして高台部 29 の畳付部はやや丸みを帯び、無釉(露胎)であって、高台から腰部にかけて回転ケズリ(左→右)が施されている。いずれも内・外面もしくは両面に櫛歯状工具で多条線文を施すもので、 $1\cdot24\cdot27\cdot30$ の外面には平行斜線文、 $18\sim20\cdot22\cdot23\cdot25\cdot26\cdot29$ には垂直平行線文、また 17 などの平行弧線文も僅かにみられる。また内面には 1 条あるいは 2 条の沈線のあるものも多く、他方では $21\cdot28\cdot30\cdot31$ などの櫛によるジグザク文様やヘラ描き文も多くにみられている。

同安窯系青磁は、1のI類の他は分類不詳であるものの、その流通時期から大半は 12 世紀後半代のものと思われる。

また青磁の 32~46 は龍泉窯系のもので、釉調は灰オリーブ色もしくはオリーブ黄色、胎土は灰白色を呈して、いずれも碗と考えられるもの。このうち 32~35·38·39 は口縁部片、36·37·40 は体部片、41~46 は高台部片であり、体部から口縁部にかけては逆「ハ」字状に立ち上がって、強くあるいは緩く内湾している様子が窺われる。

口縁端部では $32\cdot39$ は尖り気味に、35 は片刃状に仕上げられたものもみられる一方、高台部は $36\cdot41$ ~ $43\cdot45$ の器壁は厚く、また $41\cdot44$ はやや低めの形状(削り)で、42(Po08)を加えた断面は方形状を呈している。畳付部分には無釉・施釉の両方がみられ、そこから高台内へは無釉のものが多く、また 43 の端部外は面取りが施され、45 には端部内外にそれが施されるため、断面は凸レンズ状を呈している。

内・外面には沈線や文様のみられるものが多く、34の外面には恐らくは櫛状工具の刺突による RL 細線や37の2条の沈線、38・40の鎬連弁文(40は片切り)や39の連弁文など、また内面には32・34の口縁下に劃画文や33の片刃りによる複数の曲文(区画文)や花文と想定されるもの、そして底・体部境には36・37・42~44・46(Po 11・13)のように圏線や沈線がみられている。41の高台内天井部には工具による放射状の削り跡が、また46の見込み底にはヘラによる草花文(片切りか)なども遺される(図版5-1)。



第12図 出土遺物実測図(2)

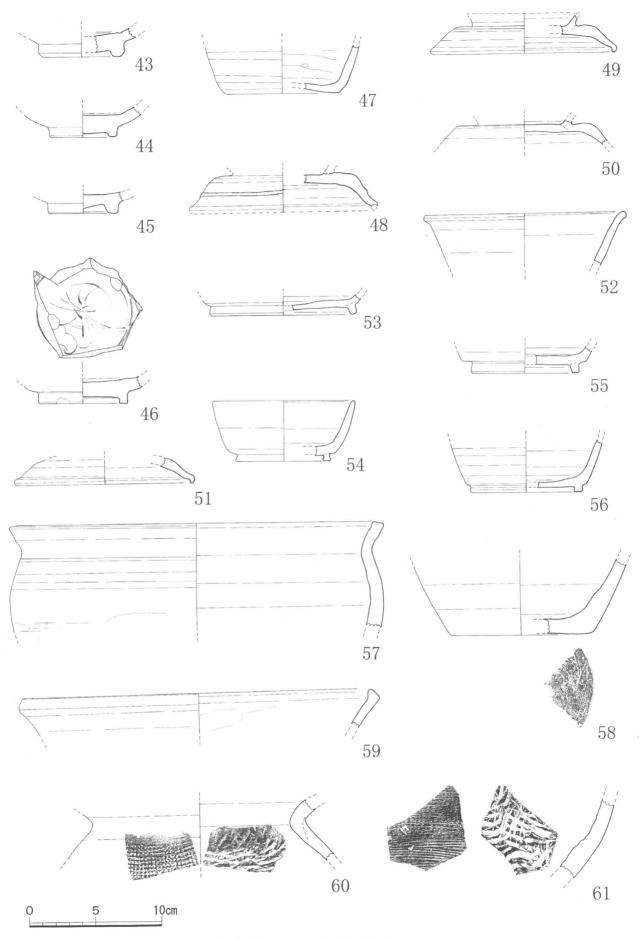
國際及	び遺物番号	種別	器機	口径(底径)cm	出土地点	備考	RAIS B	び遺物番	号 種 別	器種	口径(底径)cm	出土地点	備考
	T 1	白磁	碗	16.0	D-b区 6層	灰白色 [[類		1	須恵器	1	+	<u> </u>	<u> </u>
	2	白磁	- ON	16.0	D-b区 6層中~7-B層」		第十	52	須惠器	坏身	15.0	D-b区 6層上~中	灰色 8c末~9c前半
	3	白磁	碗	14.6	D-b区 6層中~7-B層上		三図	54	須恵器	坏身	10.6 (7.0)	D-b区 6層上~中 D-b区 6層	灰色 奈良末~平安初(? 灰色 平安 9c前半
	4	白磁	- Mi	14.6	D-c区 5層	灰白色 Ⅳ類	1	55	須恵器	坏身	(8.0)	D-c区 暗渠撹乱土	灰色 平安 9c前半
98	5	白蘇	碗	16.4		灰白色 二次的被熱 V類	出土	56	須恵器	坏身	(8.2)	D-b区 6層	灰色 平安初め
+	6	白磁	碗	16.0	D-b区 6腳~7-B爛上	灰白色 V類(?)	遺物	57	須恵器	鉢	28.0	D-b⊠ Po.09	灰色 奈良~平安
100	7	白磁	碗	17.1		灰白色 口禿 IX類(?)	実	58	須恵器	底部	(10.6)	D-b区 5層上	平安
ш	8	白磁	碗	16.0	D-a区 6層上~7-B層上		阅図	59	須恵器	鉢	(27.0)	D-b区 6層中~下	東播系 12c~13c
±	9	白磁	碗	(6.5)	D-c区 5層 Po.02	灰白色 V類	Ê	60	須恵器	曼		D-a区 6層	古墳末~奈良
遺物	10	白磁	碗	17.0	D-b区 6層中~7-B磨上	 	_	61	須恵器	畫	 	D-a区 7-B層	灰色 平安(?)
実測	11	白醚	碗	15.4	D-b区 6層中~7-B層上	灰白色 端反り X II 類		62	須恵器	横瓶	14.0	D-b⊠ Po.06	灰色
図	12	白磁	碗	-	D-b区 6層中~7-B層上	灰白色 VE類	第	63	須恵器	大甕	<u> </u>	D-b区 5屬	灰色 古代末~中世?
	13	白磁	壓(?)	_	D-b区 6層上~中	灰白色	1 +	64	須恵器	大戦	_	D-b区 6~7-B層間	灰白色
_	14	白磁		11.2	D-b区 6層中~7-B層上	灰白色 IX類	図図	65	須恵器	夔	_	D-b⊠ Po.07	灰白色
	15	青磁	碗	16.6	D-a区 5層上~6層上	同安窯系	出	66	上師器	高台付坏	(7.2)	D-b区 7-B層	にぶい黄檀色 平安
	16	青磁	碗	17.0	D-b区 6層中~7-B陽上	同安窯系 【類	±	67	上師器	坏	(6.4)	D-a Po.12	にぶい黄檀色
	17	青磁	碗	16.7	D-b区 6層中~7-B層上	同安窯系	遺物	68	上師器	坏	(6.2)	D-a区 7-b層	にぶい黄檀色
	18	青磁	碗	16.6	D-b区 6層中~7-B贈上	同安窯系	実	69	上師器	坏	(5.0)	D-b区 5欄上~中	にぶい黄檀色
	19	青磁	碗	16.6	D-b区 6腊中~7-B腊上	同安窯系	図	70	上師器	塩	15.4 (6.6)	D-a区 7-屬	浅黄橙色 平安?
	20	青磁	额	16.5	D-b区 6層中~7-B層上	同安窯系	<u></u>	71	土師器	土錘	長:4.8 幅:0.85	D-c区 4-B屬	橙色
	21	青磁	碗	15.6	D-b区 6層中~7-B層上	同安窯系	~	72	土師器	土鏈	長:2.95 幅1.5	D-c区 4-B層	褐灰色、にぷい黄橙色
	22	青磁	碗	16.0	D-b区 6層	灰オリーブ色 同安窯系		73	上節器	土錘	長:3.3 幅:2.45	D-b区 6層中~下	黄灰色、灰黄色
	23	青磁	碗	16.4	D-b区 6層	灰オリーブ色 同安窯系	第	74	胸器	童		D-b区 5層上~中	備前焼
	24	青磁	碗	16.4	D-b区 6層	オリーブ灰色 同安窯系	+ E	75	弥生土器	売底部	_	D-b区 7-B層	灰黄褐色 中期後半?
	25	青磁	碗	17.0	D-c区 5層	灰オリーブ色 同安窯系	60	76	弥生土器	高坏	_		にぶい黄檀色 後期?
鄭	26	青磁	碗	16.6	D-c区 5層	灰オリーブ色 同安窯系	出土	77	無文土器	甕or鉢		D-b区 7-B屬	にぶい黄橙色 朝鮮系?
+	27	青磁	碗	-	D-b区 6層中~7-B層上	灰オリーブ色 同安窯系	動物	78	瓦賀	足鋼	24.8	D-b区 6脚上~中	黑褐色 14~15c?
×	28	青磁	碗	- 1	D-b区 6層上~中	灰オリーブ色 同安窯系	奥	79	瓦質	土鍋	_	D-b区 6屬上	黑色
出	29	青磁	碗	(5.2)	D-a区 5層下	灰オリーブ色 同安窯系	<u> </u>	80	瓦賀	擂鉢	22.2	D-b区 5屬上~中	黒褐色 中世
±	30	青磁	Щ	(5.4)	D-b区 6層	灰白色 同安窯系	. E	81	瓦質	足鍋	_	D-c区 暗渠攪乱土	灰白色
遺物	31	青磁	膃	(5.0)	D-b区 6層	明オリーブ灰色 同安窯系		82	弥生土器	壺	-		にぶい黄橙色 1-2期
実測	32	青磁	碗	18.0	D-c区 暗渠攪乱土	灰オリーブ色 龍泉窯系 Ⅰ類		83	弥生土器	塑底部	(9.0)	周堿表採	灰白色 『期
(32)	33	青磁	车	16.2	D-b区 6層上~中	オリープ灰色 龍泉窯系 【類		84	弥生土器	売体部	- 1	周城表採	無褐色 Ⅳ期?
=	34	青磁	碗	17.0	D-b区 5層中~6層上	灰オリーブ色 龍泉窯系 1類?		85	弥生土器	變底部	(6.3)	周城表採	にぶい黄橙色 田期?
~	35	青磁	碗	17.0	D-b区 6層中~下	灰オリーブ色 龍泉窯系 I類		86	土師器?	坏	7.0	_	古墳前期?
	36	青磁	碗	_	D-b区 5層上~中	灰オリーブ色 龍泉窯系 【類		87	弥生土器	鼓形器台	- 1	周城表採	浅黄橙色 V-3期
	37	青磁	碗	-	D-b区 6層上~中	灰オリーブ色 龍泉窯系	第	88	弥生土器	變体部	- 1	周城表採	浅黄橙色 V-4期
	38	青磁	碗		D-b区 6層上~中	オリーブ灰色 龍泉窯系	十 六	89	弥生土器	豐頭部		周城表採	黒色 大木式?
	39	青磁	碗		D-a区 5棚上~6棚上	オリーブ灰色 龍泉窯系	Ø	90	須恵器	蓋坏身	12.6	周城表採	灰色 山本田(芝翔) 古墳後郷
	40	青磁	碗	- [D-c区 5層	オリーブ灰色 龍泉窯系 下方は無軸	採	91	上師器	瓷	-	周城表採	にぶい黄檀色 大木式or小谷式
[41	青磁	碗	(5.8)	D-c区 5層	オリープ灰色 龍泉窯系	取遺	92	須恵器	長頸壷	-	周城表採	灰白色 7c後半
	42	青磁	碗	(6.2)	D-a⊠ Po.08	灰オリーブ色 龍泉窯系	物実	93	須恵器	坏蓋	15.1	周城表採	灰色 奈良末~平安前期 9c?
第十	43	青磁	碗	(5.8)	D-b区 6欄	灰オリーブ色 龍泉窯系	測	94	須恵器	坏蓋	14.0	周城表採	灰色 奈良末~平安前期
Ξ	44	青磁	碗	(5.0)	D-b区 6屬上	オリーブ灰色 龍泉窯系	BXI	95	土師器?	坏	-	周域表採	浅黄橙色
880	45	青磁	碗	(5.2)	D-b区 5層?~6層上	灰オリーブ色 龍泉窯系		96	青磁	ш	11.0 (5.2)	周城表採	オリーブ灰色 同安窯系
出土	46	青磁	範	(6.6)	D-b⊠、c⊠ Po.11·13	オリーブ黄色 龍泉窯系 I類	ſ	97	陶器	ė	(10.0)	周城表採	灰黄褐色 褐釉
邀	47	陶器	企	(8.5)	D-c区 4-B屬	褐釉 被熱		98	瓦質	綽	(16.0)	周城表採	灰白色 被熱
実測	48	須恵器	坏蓋		D-b区 5層上~中	灰色 9c前半		99	陶器	境or皿	(5.0)	周城表探	黄褐色 唐津 江戸初期
680	49	須恵器	坏蓋	(14.0)	D-b区 6屬	灰色 9c前半		100	鉄製品	酸冶滓		周城表採	67 g
Ê	50	須恵器	坏蓋	I	D-b区 5~7-層間	灭色 9c前半		101	鉄製品	鍛冶滓	_	周城表採	21 g
~ [51	須恵器	坏蓋	13.5	D-a区 6層	灭色 9c前半							

第3表 実測遺物観察表

龍泉窯系青磁は分類できるもので 32·33·35·36·46 は碗 I 類と考えられて、その他についても恐らくは 12 世紀中頃から 14 世紀初頭にかけてのものが多いと推定される。

47 は被熱した褐釉陶器の壺で、やや上げ底状を呈し、体部は小さく外傾するもの。釉色はやや黄味を帯びた白濁色で、胎土は濃褐色を呈する。中国もしくは朝鮮半島で $15{\sim}16$ 世紀につくられたものと推定される。

 $48\sim65$ は須恵器であり(第 $13\cdot14$ 図·第 3 表)、いずれも胎土は灰色を呈して回転ナデの仕上げが施されるもの。器種は $48\sim51$ の坏蓋、 $52\sim56$ の坏身、 $57\cdot59$ の鉢、61 の壷、58 は鉢か壺の底部と思われ



第13図 出土遺物実測図(3)

るもの、また62は横瓶、60・63~65は甕類に分類される。

このうち坏蓋は、いずれも輪状つまみのものと想定されるもので、削りが施された天井部は広く平坦となる一方で、体部へは強く屈曲して移行し、「八」字状に開くものが多い。また口縁部は小さく内傾に折れ、下垂して鳥嘴状におさまるものは 48・49・51 にみられて、また 48 の外面には過度焼成による重ねた上物の端部付着が認められる。いずれも 9 世紀前半のものと考えられる。

坏身のうち 52 は高台付と想定されて、口縁端部で短小に外反し、入念な回転ナデが施される金属器模倣品と思われるもので、55 もその可能性をもち、底・体部境は角張るもの。また $53\sim56$ は高台は低く、体部は逆「八」字状に開き、52 は直線的に開いている。いずれも若干の時期差はあるものの、8 世紀末 ~9 世紀前半までのものである。

鉢の 57(Po 09)は、口頸部は緩く逆「八」字状に開いて立ち上がり、端頂部は斜めに平坦面をもつもので、また 59 は東播系のこね鉢となり、口縁端部は肥厚気味に逆「く」字状に屈折する。前者は奈良~平安、後者は 12 世紀~13 世紀のものである。また底部片の 58 は、体部との境界の稜線は明瞭であり、平安期でも古いものと思われる。

61 の壷は外面にカキ目状の回転痕、内面に同心円叩き文をもち、緩く内湾気味に開く平安期のものだろう。また口頸部を逆「八」字状に開いて立ち上がる $62(Po\ 06)$ は横瓶であり、外面に平行叩き目やカキ目、内面に同心円状の叩き目をもつものである(図版 4-2)。

甕の60の口縁部は強く外反し、頸部は「く」字状に屈曲して、この傾向は63にもみられている。前者の外面には体上部に縄蓆文状の叩き目、内面には同心円状の叩き目を、また両面の上方にはナデ消し痕を窺える。後者は64とともに大甕であり、板状工具による回転ナデ痕がみられて、64には外面に平行叩き目ののち横方向のナデ痕、内面には同心円状の叩き目がみられている。これは65(Po07)にも共通して、外面はカキ目とも観察されるものである。

時期不詳のものは多いが、63は平安末期~中世にかけてのものと思われる。

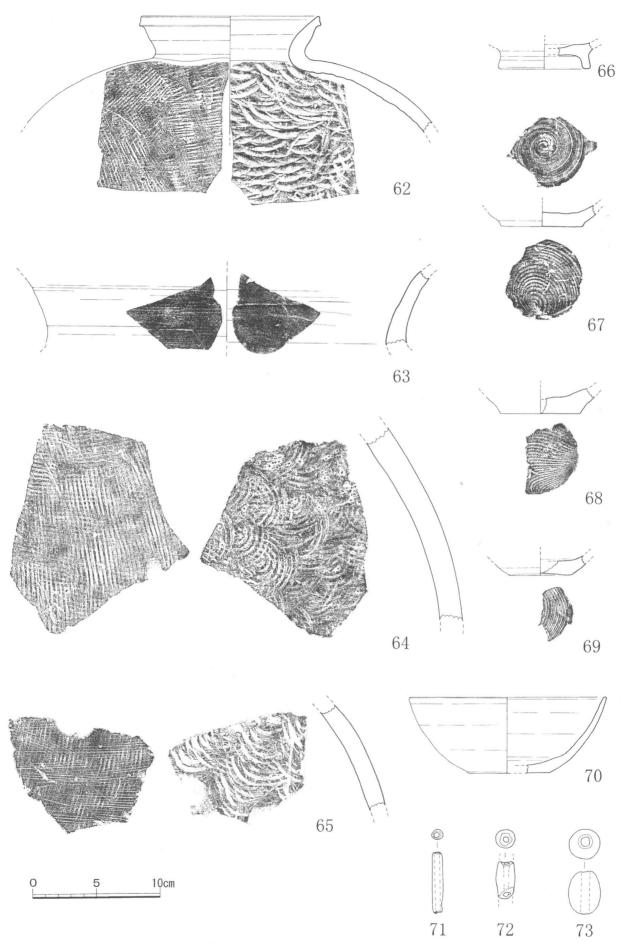
土師器の $66\sim73$ は、胎土は鈍い黄褐色を呈し(第 14 図・第 3 表)、66 は高台付高坏、 $67\sim69$ は坏、70 は埦、 $71\sim73$ は土錘で、器種にはいずれも内・外面ともに回転ナデが施されている。

このうち 66 は平安期のもので、高台は高く、やや「八」字状に開くもの。坏はいずれも平底で、底部と体部との境界の稜線があり、また立ち上がりは僅かに絞るもので、67(Po12)・69 は回転糸切り痕、68 は静止糸切り痕がみられる(図版 4-3)。境の 70 は平底で、体部は緩く内湾して立ち上がり、逆「八」字状に開いて口縁部へ移行する。口縁端部は小さく尖り気味でおさめ、また内・外面ともに轆轤整形痕を入念に横ナデして消し、化粧塗を施す一方で、底部も回転糸切り痕をナデ消ししている。おそらくは平安期の入念なつくりの上物であろう。土錘は、細長の管状のものは 71・72 であり、73 はやや張った楕円状を呈して、漁労用の錘として使用されたものと思われる。

以降は、僅出な中でも特徴的なものを説明する。

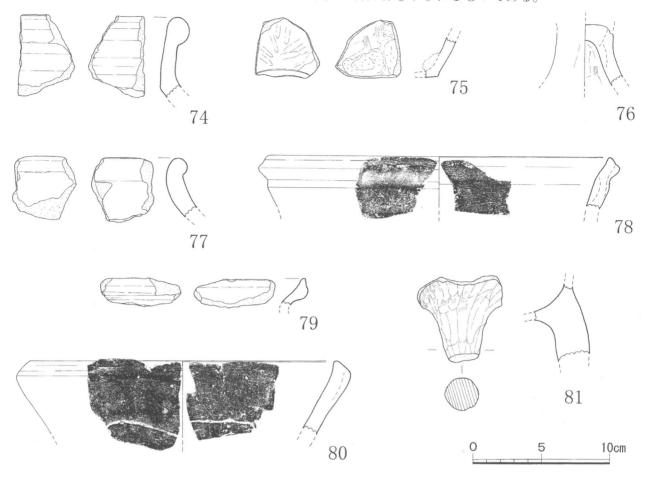
74 は備前焼の壷で、玉縁状の口縁部をもつもの。内・外面は回転ナデを施し、胎土は褐灰色を呈する。 75・76 は弥生土器で、色調は灰黄褐色~淡黄橙色を呈するもの。前者は甕の底部で体部は外傾して開き、 また風化のため判然としないが、外面は磨き、内面はハケ調整が施されたもので、おそらくは弥生中期 後半のものだろう。後者は高坏の脚の上半部であり、弥生後期の可能性の強いものである。

77 は朝鮮系の無紋土器と想定されるもので、甕か鉢の口縁部である。太い玉縁状の口縁をもち、頸部から体上部にかけて「八」字状に開き、時期は弥生前期末葉ごろと推定される。そして 78~81 は瓦質土器で、いずれも灰白色~黒褐色を呈するもの。78・81 は足鍋でススが付着し、内・外面ともへラもしくは板状工具で(横)ナデが施されている。そのうち前者は頸部で浅く「く」字状にくぼみ、口縁断面は三角形状を呈し、また端部外斜面も抑えナデにより浅くくぼむ。中世の 14 世紀~15 世紀のもの。79 は土鍋と想定される口縁部で、体部は「八」字状に開いて、端部の外面下端は膨らみをもって、断面は三角形状を呈する。80 はすり鉢で、口縁部は僅かに肥厚し、外面に内傾斜面をつくる中世のもの。外面



第14図 出土遺物実測図(4)

には磨き、内面はハケ目(斜め)や磨り目、3条一単位の斜目跡もみられるものである。



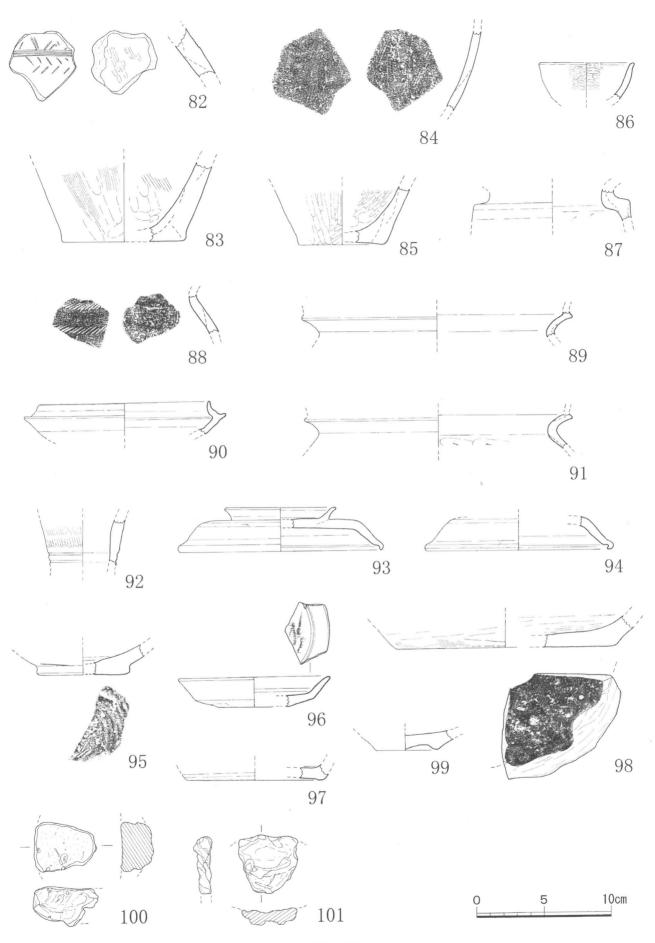
第15図 出土遺物実測図(5)

(3) 周域からの採取遺物

本説明資料は指呼範囲の西域一帯を踏査して得られたものであり、主には調査地点の西端に既設された工事用水路の残土山から採集したものである。総数は 444 点を数えて多く、平成 $19\cdot 20$ 年度調査遺物とほぼ共通するものが確認されたことから、本遺跡の関連遺物として取り扱うこととし、以下特徴的なものを抽出して詳述することとした(第 $3\cdot 16$ 図、第 $2\cdot 3$ 表)。

まず $82\sim85\cdot87\sim89$ は弥生土器で、82 は壷、 $83\sim85\cdot88\cdot89$ は甕、87 は鼓形器台である。その 82 は胎土は鈍い黄橙色を呈し、外面には 3 条の平行沈線を挟んで、上方に複線鋸歯文、下方に無軸羽状文がみられる。施文具は貝殻の縁を使用したもので、内面には磨きが施され、I-2 期まで遡るもの。83 も I 期のもので、平底であり、底・体部境には稜を有して、体部は外傾して開いている。外面には縦方向にハケやナデ、底面は磨き、内面にもハケ・ナデ痕を確認できる。84 は内面に削りののちハケがみられたIV 期のもので、85 の外面は縦方向の磨き、内面の磨きやナデが顕著なもので、両面に焼成時の黒斑か焦げ状のススが付着する。底部は僅かにくぼんだ平底で、83 と同様の形態を有するIII 期のものと思われる。

87 は器台の筒部〜台部片で、外面は横ナデ、内面は削りがみられるもの。筒部は逆「コ」字状に強く外反し、複合部は直角に折れ曲がり、台部は反り気味に小さく開く。V-3期のもの。88 は「八」字状に開く体上部片で、外面には貝殻腹縁による 2 段の連続刺突文、中間と文様下部には横ナデ、また内面に削りが認められる V-4期のものである。89 は複合口縁部で、複合部は小さく水平方向に突出し、頸部は「く」字状に屈曲する。大木式の可能性をもつもの。



第16図 採取遺物実測図

86・91・95 は土師器である。86 は小型の坏で深みがあり、体部は内湾気味に小さく開く。口縁部は僅かに外反して、恐らくは古墳前期のものか。また91 は複合口縁を有する甕の頸部である。形態は89 と同様で、外面に横ナデ、内面は頸部に横ナデ、体部に削りがみられ、大木式もしくは小谷式と想定される。95 は83 と形態が類似するが、底面部は高台状に絞って立ち上がる。内・外面に回転ナデが施されて、底面にはやや粗い回転糸切り痕が認められる。

また 90・92~94 は須恵器で灰色を呈する。90 は蓋坏の身で、体部はやや内湾気味になり、大きく開いて受け部へと続く。受け部は短く斜め上方に突出する。立ち上がりは反り気味に内傾して端部は尖るもの。内・外面とも横ナデを施した扁平な器形であり、山本Ⅲ(芝期)の古墳後期ものである。92 は長頸壷の頸部下半片で、やや外傾する 7 世紀後半のもの。内面はナデ、外面は板状工具による連続刺突痕や下方に 2 状の沈線が認められる。93・94 は坏蓋で奈良末~平安前期にもの。いずれも輪状つまみを有して、体部は「八」字状に下降し鳥嘴状の口縁部におさめている。内・外面とも回転ナデが施されて、前者は口縁付近に重ね焼跡が遺り、天井部は広く入念に削られたもの。また後者の端部はやや内向きである。

そして 96 は同安窯系青磁皿である。胎土は灰白色、釉色はオリーブ灰色を呈するもので、体中部位で屈曲し、見込み境に段を有する。また体部下半と底部は無釉で、見込みには櫛によるジグザグ文様を施した皿 I 類に分類されるものである。97 は褐釉陶器壷の底部で、中央がややくぼむ平底となる。釉色は外面の灰黄褐色、内面は濁った黄褐色を呈する。

98 は瓦質土器の鉢で、内・外面ともに灰白色を呈し、ハケ・ナデが認められるもの。平底は大径で、体部境には稜をなす。99 は唐津焼の埦もしくは皿で、底部の外面中央が凸レンズ状に膨らみ、高台は低いもの。胎土は黄褐色、釉色も黄褐色を呈する江戸時代初期のものである。

最後に $100\cdot 101$ は鍛冶滓である。恐らくは近くで営まれていた鍛冶場の遺物と想定されるもので、それぞれ $67\,\mathrm{g}$ と $21\,\mathrm{g}$ を量っている。

以上、本章も含めて元島根大学教授の田中義昭氏には多くのご教示を頂いている。ここに記して謝意を表すものである。

参考文献:正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年-山陽・山陰-』1992年5月 木耳社 山陰考古学研究集会『山陰における中世前期の貿易陶磁器』1998年8月 中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』1995年12月 真陽社 大庭康時・佐伯弘次ほか『中世都市・博多を掘る』2008年3月 海鳥社

5. 小 結

第17図のとおり、本地点域は蛇行する匹見川下流域にあたり、それによって形成された肥沃な農耕(水田)地帯であることは折に触れて述べたところであるが、その分洪水禍にも多く晒されてきた地域ともいえる。また現在の畦畔は、河川沿いに平行もしくは蛇行した形状をもって配列していることからも、地点域近くまで河川が寄り、永い年月をかけて現在の河川位置にまで移動していった推測は平成19年度

調査報告書でも述べたところである。

付け加えると、地形的に隅丸山八幡宮から隅村橋に至る地点域が河川の蛇行点であり、そこから西側の山地までに大きく内湾する平野部は、勢いの落ちた河川の形成による、いわゆる澱み的な様相をもった湿地帯であった可能性が高いように思う。丸山遺跡は立地的に山地寄りの最も深い地点域に位置しているのも興味深く、おそらくは安定した地点域であったものと考えている。

前年度に加え、この度の調査からも少なからず弥生土器が確認されているが、それは水稲が定着していた弥生時代から人びとが住みつき、集落を形成して低湿地を可耕利用したことを物語るものである。さらに古墳時代を経て、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺物出土量は増大する。反面、14世紀から16世紀にかけての遺物量は減少するが、近世以降はまた国産陶磁器を中心にみられるようになっていく。

この 2 γ 年の調査で確認された遺物は 約 2,400 点にのぼるが、これは弥生時代 \sim 近世期までの永続的な人類の営みを示



第17図 俯瞰した事業範囲地形図

唆するものであり、遺跡地一帯は山河の幸を得られる生活好地としての条件を旧くから備えていたもの と解される。

一方、前述の蛇行点から始まる山麓一帯はしっかりした台地であると捉えられることから、旧くから人びとは眼下に水田(可耕)地帯をおさめつつ、居住は当該区域のいずれかに求めたのではないかと想像している。また遺物の観点からは、とくに平安期~鎌倉期に盛行が認められることから、当該期において地域の支配階級者もしくは地侍級の居館が近くに存在していた可能性を窺えるもので、恐らくは現在の居住区をなす山麓一帯でも、八幡宮から平成 19 年度調査地点までにかけて存在していたものと推定している。

このように、隅地区の人びとの営みを示唆する多くの貴重な資料が得られたことは本発掘調査の有意 義な成果であったといえ、このたびの所見をもってひとまずの小結に代えるとともに、また更なる地域 史の解明について、今後の調査・研究に期待するものである。



1. 西側からみた調査地点(遠景)



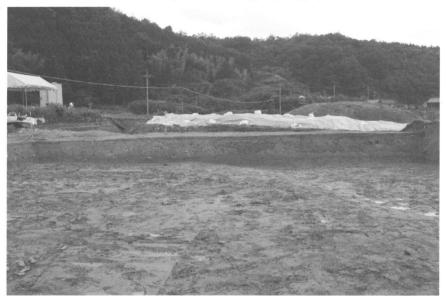
2. 西側からみた調査地点 (近景)



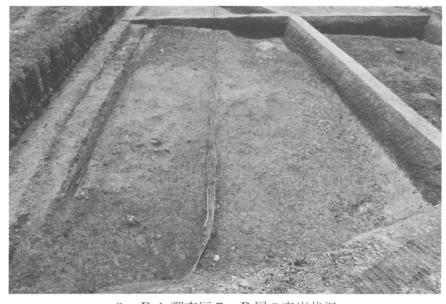
3. D-b 調査区 5層の表出状況



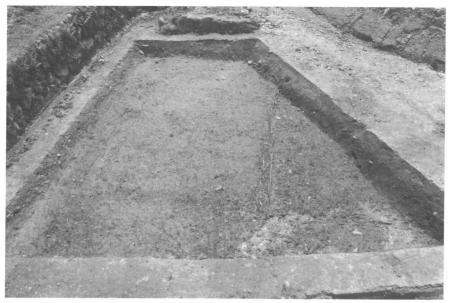
1. D-c 調査区4-B層の表出状況



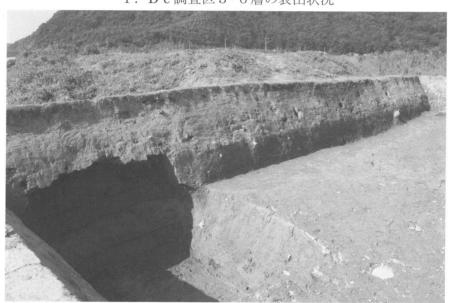
2. D-a 調査区6層の表出状況



3. D-b調査区7-B層の表出状況



1. D-c 調査区 5・6 層の表出状況



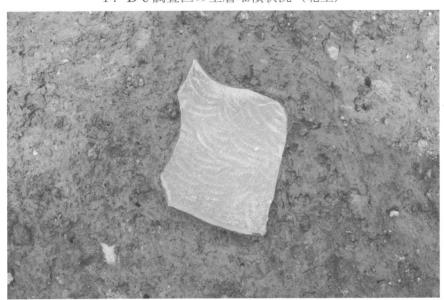
2. D-a 調査区の土層堆積状況(北壁)



3. D-b 調査区の土層堆積状況(西壁)



1. D-c 調査区の土層堆積状況(北壁)



2. Po06 (須恵器・横瓶) の検出状況



3. Po12(土師器・坏)の検出状況



1. Po13 (青磁·碗) の検出状況



2. 発掘体験風景



3. 発掘作業風景



1. P01の検出状況(D-c 調査区)



2. 下位層の確認状況 (試掘坑4)



3. 流木の検出状況 (試掘坑2)



1. D-a調査区の完掘状況(西から)



2. D-b 調査区の完掘状況 (東から)



3. D-c 調査区の完掘状況(南から)



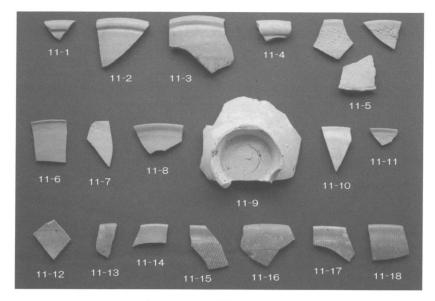
1. 遺跡の完掘状況(東から)



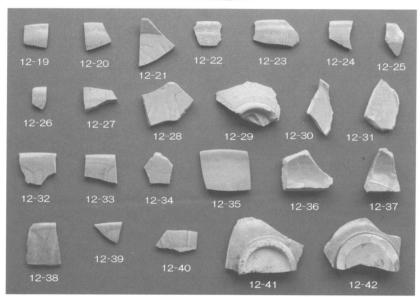
2. 遺物採集地点を望む



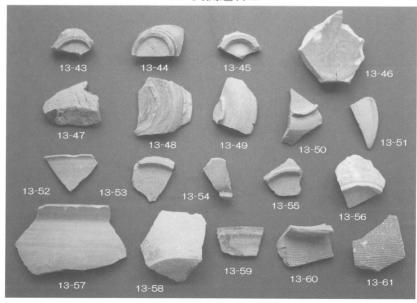
3. 施工後の調査地点(西側から)



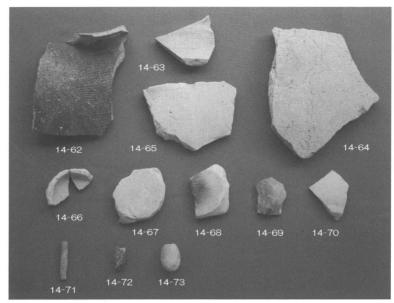
1. 実測遺物 1



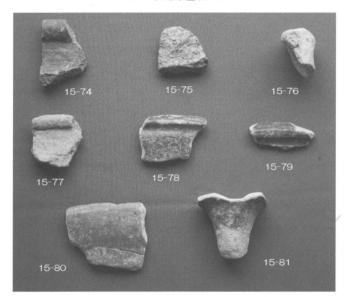
2. 実測遺物 2



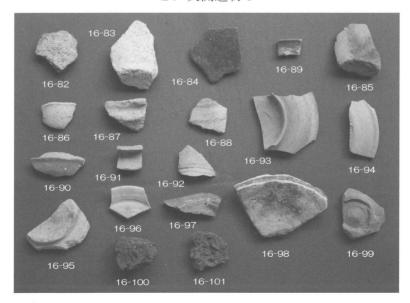
3. 実測遺物3



1. 実測遺物 4



2. 実測遺物 5



3. 実測遺物6 (採取遺物)

報告書抄録

	ENGLISHED STATES		1000											
ふりがな	まるやまいせ	き	WW	N. Conf.	Will	N. W. S.								
書。一名	丸山遺跡													
副書名	経営体育成基	経営体育成基盤事業隅地区に伴う発掘調査報告書												
巻 次	A STATE OF THE PARTY OF THE PAR													
シリーズ名	ノリーズ名													
シリーズ番号														
編集者名	山本 浩之													
編集機関	益田市教育委	益田市教育委員会												
所 在 地	₹698-0033	島根県益	田市元	町 11 番	15 号	Tel 0856 — 31	-0623	1						
発行年月日	2010年3月1	.9日	ar A											
12 84		13-	F		V 15	160000								
所収遺跡名	所在地		遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査						
		市町村	番号	1	was in		(m²)	原因						
	はまれけん 島根県			34°	131°	2008.5.27		圃場						
まるやまいせき 丸山遺跡	益田市 隅 籽	32204		36'	48'	~ 1	270 m²	整備						
	新	Ava	A	37"	59	2008.7.17		事業						
遺跡名	種別	主な	(主)	な遺構	十十	な遺物	特記事	項						
		時代			21/1/18	TACK MARK								
X72/18		弥生、	弥生、 古代~ 中世 1 基、及び			生土器								
火 草、						上師器								
丸山遺跡	集落跡	中世、				原恵器	WIV							
		近世	暗渠	至(近代)	世界 人名英格兰	兹•白磁								
CALL FOR THE	The said like				国産際	園磁器ほか								

丸山遺跡

ー経営体育成基盤整備事業隅地区に伴う発掘掘調査報告書ー 平成 22 年 3 月発行

編集·発行 益田市教育委員会

島根県益田市元町 11番 15号

印刷 富士印刷株式会社